

8 9 県立串本古座高校所蔵 中根文庫 資料番号 04030 1 2 3 4 5 6 7 8 9 160 1 2 3 4 5 6 7 8 9

漢室道筆

上二

291  
104

21

璞屋隨筆 第十二編

291  
104  
1

中根七郎  
贈

昭和丁年三月十六日  
中根七郎





世の中にはよなう樂一きは酒なり。春の日花をめで、秋の夜月をあはれみたのあた  
雪を見るによ、酒なかりせば淋一からべ。限りよきうれひを忘れ、ひたすら腹だへ一きを忍  
ばるは、酒なり。宿はあたひあき寝、夜先る玉といふと、此く一きうま酒に一かめや。吉田の  
兼好が色一のまざらん男など、ひーがゆく酒元のまぬ人こそ玉の盃の底なき心すれ、一かば  
あとと、醉くせあーき人はのみをよき。醉めぐれば、くせ出で、うつて坐む、おれをもお  
忘れ、かくくなきあやまちすなり。彼やまたのおりちや、大江山にこもリ一鬼のたぐひは、酒と見  
ては黒き白き之外、おのづかへのあくとおのさまあれ、酔みて殺されむつれ(草原)

一大酒をいまーむ

宇井可直遺稿

瓊屋隨筆 第十二編

附録  
和漢漠瓊屋隨筆詩歌歌謡

尚書會の記

撰軍歌今様歌篇

高嶺正風氏譯京の後差誠されたる歌

小松内大臣と北條泰時

一九貝桶の説

二二二二尚書會の記

三二二二撰軍歌今様歌篇

高嶺正風氏譯京の後差誠されたる歌

高堂山在熊本

井村眞琴氏

福田鶴處氏

田四郎

雜賀貞次郎氏

宇井縦利

和寺の法勝寺酒のみれすみて、かたはらあらかーかを(と)とて、頭にか(き)舞出たはせ  
かーかー二きかくへぬけされば、くすーが(つ)だのみ、首(し)ゆ(し)るば(う)いきみきー三、耳鼻  
か(か)失せて、命(めい)は(や)は助(すけ)か(き)と、また具覺坊の馬の口(くち)の男(おとこ)、一度(いちど)せ(せ)よとて、二一度  
けくのみで、小(こ)橋(はし)にて奈良(なら)寺(てら)の寺(てら)と(い)さかひ、力を抜(ぬ)いて振(ふ)り、いかはてはあるーの  
腰(こし)を(き)さ(さ)、ひ(ひ)にかたは(あ)てけす。一と(さ)か(く)き曲(まげ)なり。是(これ)のものは、のむがま  
ら(ら)たまひまで、か(か)て酒(さけ)のまよ(まよ)に(こ)そあらめ。近(ちか)い頃(ごろ)の席(せき)にある(あ)は志(し)ひの  
ませて興(き)あ(あ)と、客人(きりん)は(は)ま(ま)に、ひき(ひき)う(う)れ(れ)散(さん)の限(かぎ)のみ(み)くす(く)を(を)習慣(くわん)慣(なま)とす。ゑ  
ひ(ひ)く(く)て(て)よ(よ)さ(さ)か(か)く(く)て、あれが身(み)の上(う)を(を)ほ(ほ)すが、た(た)は(は)腹(はら)、た(た)く(く)強(つよ)か(か)た(た)りあり。女(めの)と(と)一  
か(か)ひに(に)さ(さ)か(か)う(う)と、口(くち)に(に)キ(キ)つけ(つけ)、お(お)の(の)か(か)れ(れ)ば(ば)ち(ち)あり。男(おとこ)は(は)腕(うで)ま(ま)く(く)り、女(めの)は(は)髪(かみ)を(を)束(いと)う(う)た(た)ぬ(ぬ)き(き)て、顔(おもて)を(を)一  
拳(こぶし)を(を)う(う)つ(つ)あ(あ)り、黒(くろ)き(き)肌(はだ)を(を)か(か)た(た)ぬ(ぬ)き(き)て、顔(おもて)を(を)一  
器(き)物(もの)を(を)蹴(う)ち(ち)ら(ら)、舞(まい)ぐ(ぐ)る(る)あ(あ)り、い(い)が(が)ひ(ひ)あ(あ)き(き)こと(こと)と、が(が)さ(さ)か(か)ひ(ひ)の、一(一)つ(つ)あ(あ)ひ(ひ)て、醉(酔)酒(しゅ)する(する)あ(あ)  
と(と)り(り)て見(み)長(なが)ー。あ(あ)は(は)ま(ま)から(から)ん(ん)と(と)て、足(あし)は(は)ナ(ナ)文(ぶん)ま(ま)た(た)ぬ(ぬ)、大(おお)駄(だ)歩(ある)き(き)、せ(せ)ず(ず)と(と)よ(よ)う(う)め(め)か(か)く(く)は  
が(が)あ(あ)。酒(さけ)は(は)百(ひゃく)葉(よう)の長(なが)い(い)と(と)、衣(いぬ)温(ぬる)い(い)て(て)疲(つか)れ(れ)き(き)、日(ひ)な(な)け(け)た(た)ゑ(ゑ)ひ(ひ)く(く)る(る)ひ(ひ)、だ(だ)く(く)が(が)

リ、果(は)て、た(た)か(か)らや(や)失(失)ひ(ひ)の(の)ぞ(ぞ)が。か(か)よ(よ)酒(さけ)を(を)た(た)か(か)び(び)人(じん)傳(つた)へ(へ)ま(ま)す(す)。今(いま)ま  
が(が)ら(ら)す(す)あ(あ)く(く)ら(ら)ひ(ひ)ま(ま)た(た)母(おとこ)を(を)ま(ま)く(く)ら(ら)い(い)ど(ど)う(う)た(た)ひ(ひ)ー。下(しも)の(の)大(だい)人(じん)に(に)あ(あ)ら(ら)ひ(ひ)よ。

(明治十九年)

## 二、恋

アラ(アラ)と(と)お(お)か(か)ー(ー)か(か)ー(ー)せ(せ)に(に)あ(あ)て(て)ゆ(ゆ)く(く)た(た)か(か)く(く)か(か)、と(と)正(ま)め(め)ー(ー)の(の)う(う)あ(あ)が  
め(め)れ(れ)た(た)は(は)、と(と)も(も)く(く)こ(こ)う(う)あ(あ)り。志(し)か(か)は(は)あ(あ)れ(れ)、う(う)つ(つ)せ(せ)み(み)の(の)世(せ)の中(なか)、飛(と)鳥(とり)川(がわ)の(の)瀬(瀬)と(か  
は)う(う)き(き)ー(ー)、瀬(瀬)中(なか)の(の)道(みち)を(を)か(か)く(く)て、二(二)つ(つ)の(の)ナ(ナ)ー(ー)の(の)あ(あ)、た(た)ま(ま)く(く)、あ(あ)づ(づ)か(か)の(の)を(を)ら(ら)ー(ー)て、  
あ(あ)か(か)た(た)じ(じ)と(と)め(め)て(て)する(する)わ(わ)た(た)ば(ば)あ(あ)う(う)す(す)あ(あ)り。絶(絶)版(ばん)の(の)か(か)く(く)い(い)時(とき)み(み)の(の)う(う)に(に)そ(そ)か(か)ぬ  
そ(そ)と(と)つ(つ)た(た)ひ(ひ)く(く)か(か)、大(だい)か(か)た(た)の(の)や(や)う(う)に(に)お(お)か(か)ず(ず)て(て)

人(ひと)う(う)だ(だ)花(はな)を(を)絵(え)葉(葉)に(に)う(う)づ(づ)か(か)世(せ)み(み)あ(あ)は(は)ー(ー)の(の)事(こと)二(二)や(や)あ(あ)、七(七)

(明治十九年)

三春情有花鳥

四

此ごろのあひとて、朝いあがからて、つる鶯か、ナガハシぐにかをくらん。殊れの花があ  
かすらわか、かくして、朝けのほよもあつらうか、びたすらうかれど、ゆきすりの神に  
ほす朝霞に、あひとゆら一そで、こか、一わせんねは、すか、すだーの花は、萬金  
白銀さみほひまうと、どうまくすみれ草とみ草の花は、うすくくともむらさき  
のぬよやにいはえど、あやむーるーきたらんとく、とがー下をあつかうるゆ。麦生をく  
きてとびかみつぼくらあはうとくやーへ、天あらがくの聲は、八重のあざれてきこゆ。  
鷺山のサーキいとせかーくはおほゆるものか、こうろあての花はくちうせし、おむか鳥の  
音は強あこそとほいあれ。いとや跡をおひつ、奥山深くわせばやとおかるひのみ、いと志  
づめがたくて

かくばからすまじうにのうえても、ひおゆく駒はひきかへら、  
折かーのうつりかめりは、かにじかくすよあれど。

(昭和一年)

田山水の画に題す

千重かさあう高出鎌手、や高らかにえびえで、なかばく雲をかくろひ、百重にた、さうは原の井  
う、蔵たきつ水煙、鋸刃にきらひて一ぐいきほひ、見くく袖ぬくらたす。木のみ、枝あす  
り、くらぶの奥をあがめ、谷川の水の、ふは見え、かくれて、はるかくよとのたりとぞつてあがれ、  
そとに棹さす釣船の、まがたまが、から裏のサーキやうかべたり、あほこまやかに見ゆてゆけば、  
まるおや、ちうり、藤のつらさうに、耳高きか人のゆがめる枝も、木橋をたゞき渡らんす  
るを、ひさ、「わお、わのほが、袖ひかへたるが、筆のすたびと見えず」とくをや。はせ  
に名だる酒、たみのわすにした。

かく雪にあがは、くやたかぬすうひだぢやくも見え

(昭和一年)

五除夜

五

ま、たゞとおもひへひ、松たて、運運がさうる、あみへ一叶が、すきい、かたとか  
り見ねば、何ひとつえたらしのあへ、いたづら年の中重ね、あへ、がせひへ、  
一は、まどろむほと、時計のちんとある音だ、同あへがえあね、はやあ、のと  
さかひにわかねば、

なーえた。車ひとつたすあき身なる年は、とまでをほんとすら

(明治七年)

### 六 遊日記

あつたへがたすに、湯葉一束すらせなどすがとこらせき庭の、とみにさきだつべきかは、く  
でやと思ひきてかねどどう持せて、とあら山がけにわせ合つ。さうつころ若葉のかげ、うる名  
のう出たる時鳥こそ、ぐみくせが、かーか。今はおくれたる鳥の、ゆぢが、うくとえぬかは、  
一はあ、ぬむのから構ひが、鳴立つ蟬の聲こそ時得候あれ。朱竹の水の方は猿轡  
さきうちとほー。あへが事一汗のあ、押のじひつ、やから岩がね轡ー、一は、まどろむ

程にひぐらーあきと夕日すて、山のああたにあひかば、松吹く風さ／蟬の聲となつて

(明治七年)

### 七 富田川堤防復舊工事竣工式

今年明治三年十月十八日、富田川つみくじ／＼のことく築キ終て、其竣工式と、有志の君達らかの一侍。おれおおへらく、去年の秋保水の禍に罹り一時め、状況を回顧す  
れば、河水溢れ、千萬の堤防の間に打崩され、田畠も家も長屋も流れ失せて、數多の村人へ  
水に駆れて死せりに、今まだある深えたる人より、高き下れおく、命ふに空あく、傍に寄り  
なく、泥のほの中にたよひ、ちあくたかー、あくに因つき、叫び聲かれて、天つ丸であつ  
みあーは、かーとが、かーからさ、かかる、ひまが、ことだから、人民の疾苦聞えあら  
れ、最も大徳を一とぞ状況を見えあはーあひ、ぐあひ、おの喜びを賜ひ、せり、河堤を築  
かせ給ひ。稱賛辭は、また良事也。其の事を記せらるゝと、まだ一年を経て、  
夷く築役で、それを此とぞあぐるに並む一歩盡つて、ひは、さんや、が、こみよらん

七

や。おのれと此を一石に傳へて

てみせばむかにまで(キセイ)ぬ水あらひをあたかおもゆ  
と、うたひあぐよ、大徳裏のあまうだニモ。

### ノ 頃 分

秋のあつさむ、夏あつことした堪がたうじと甚一かうつるき、サムはみ空かくすり、すだれふ  
くゆのいとす、一けねむ、室あおむれ、文机はあわて歸廻、あみ巻もと枕と、一筆一まくら  
み更いとせんせん、たゞあ、ぬ御前、がくきをうち見なむ、ぬかがくす、だれ吹放ち、御もか  
むかとひらがほひと、奥床の掛物をがぬむをまきすあるぬく、開戸たゞく音をほせーく、雨さ  
うちそひて、野あきのゆのあきたつむこそ、

ともすかば野のいからむちばかう吹くが聲かのゆあびーで  
と口すかば、おどろくへーくおほえぞ。

(昭和十四年)

### 九新年総母の昌平ニシテ

今年の一月は總母暮忌にまつて、年の始のほきえせがれば、おがくから花寫をめです、がく  
もあく、たれこめて文見う外はあかつき、水屋集はらまだよりおまかがくす、いやとておみかでく  
に文の部新琴と、うし中だ今世の中萬にこびつらひだらんほらせたうぢつおむえと、年の始  
のは、ギえすと、高き感きわいためあく、馬車を急かせざりて、口に名の手掛へと走りあぐか、ま  
くたゞみかと、思ひすひざせたとうぢと、うべーかあつ、よくかうか、ち務るあくつらひか。おの  
都方の事はしらされど、かる田舎り、引一かく、ほーと、三日の間は便より、廿日七日ころまで、其  
かへすところは一つあぐか、おけにかかはーからぬをあつと、思ひつづけたう折一か、季子が未  
りて今朝は是をかう来つる、おすき見在は、名つきと葉まわう、處の人はまだ、おまか  
忌中の事は門口に書きて押おきつねは、近き人の事は知つらひとおき、つがやきつーおみか。  
くまだあぐ一事あき、おぼうせの人の名簿すべりてある上を、とあがせあがらやーて

ちぎりをばまた紙おみをあがの年のがせんとあがら

二はとまへるゝあつたにて、おのれかひがあらん」と。

(明治廿九年)

## 一〇 痢

老水僧が「傍人にひどいくせはありとどよわれたほゆるせ敷島の道」とよみ給ひ一はす。さて世に憐なき人はあきだり。彼駒井間にて鷺の鳴声似たる並音器が帝、また操心のつかひ餘り杉本某をも這田からば、いつもこの樂器よくするべからず。其憐か時にあたりて承敬したるより、二は枝葉がくわめれど、われにはゆるせ敷島の道といふべたらん。序などいかね難むいとべき、あほくせとする方あたれうやうなり。称衡が萬葉を墨々夜御千係載承朝臣に述べらひたまし、嘗てせどせどが、是等は其憐の篤きわらがちに身をあらます。俗親に憐なといふ今すら七憐半矣といふ。され余りの事にせよ思ふた、近きニテ、生字病氣の人を見て、西洋憐あ、漢憐あ、あほ高ぶくせ、あほはーらぬ事を奇談するべからず。又は白雲がみ、あほは人詞とが、あほは體裁をつくらひ河を出づれば、ス焉キよ存乎異様なる枝葉夢へ、ナガリ其た漢語つかひ、腹をかゆぐ。

あるひながけたる舞一と音曲などかたり。人の追憶まほたうけ、圓舞乘りうぬぼくと憐などまで、書き故へあは、ゆひとにゆきわざにて、實にセ憐半矣、経多からんが一。されど是程のくせは片腹いたさきび止て、人をきこひふ程のことはあらはれど、世に恐ひべきはあき憐なり。彼称衡、子仕事め如く、おのれの身をとほ、また人をきこひふ程のを。であくせめ一についはん。まゝ人をうたがへくせ、へつらふくせ、偽ひくせ、えろくせ、かきとふくせ、依怙頭頂する憐を、びひとぬけば、限りあがつづ。これは見草、圓道一、まかがぬうち、早く身懶して憐やり給ひと、あたう報一といふ。あまた一つの憐あらんか。

(明治廿九年)

## 一一 築

石室はあれど、鉛室はあれど、画書き文かくにはモ室也一かす。すみの色濃うて淡うて、文書たうし細うて書き得るのみならず、ところの色ナヘあらはれて、見入人めでた一とす。あはれとが思はずは、こゝがあとにこそあれ。お続びつる毛の力によれども下りあはせ。うやぎの毛はうと

おもはせ、鹿の毛はあはれと思はせ、狸の毛は人をだまふら、猿の毛牛虚空をかへ便よキだ。  
かくいほうひたぶろにたのみかたき才様をかど、尚文からにはる羊うし鉛筆もす、も筆まば  
うと、ぞいふくわ。

(明治三十一年)

## 一一 猿かき筆のはあー

古が一ある箇箇の毛る、箇樽にむのかきつけんと、筆箇りゆきて、大なる筆をもとむ。ふで箇  
いが折手一筆つへーたすば、三日つあひてかくせせばらん。これまでまち疏ぐんど、ま價ぐじ  
ば、ましまじて金糸、鏡にてうら申さんといが、万筆とあたらぬ、一ちすれども、外下もとむき  
かたすあせば、あつらへて帰らぬ。たゞ二日、かくあひて、ある筆絃に用ひ、おきて見せた、おの  
ルが筆箇にあつらだるがき、筆をもひつき、といが、かへくて、その大へあら筆は筆をかくに  
やと何ひつねば、筆絃にたて、何をかくにか知らぬども、萬筆箇のあつらにて、あなたひ六歳にてゆ  
く筆をあうと、箇箇のあう。さておもはーにたがはさうーか、ナニにそぞ破あかき筆  
けられ。

猿かかくみどもあまあまうかと、こづのつたうかうから、さあ、お体にて、筆絃たぢか  
いの筆、おのせに筆絃にてうらかくみおむと、いき、さあ、とあがたすと、筆箇よりとつて來  
たらす、かわせなーと、か、箇箇い、かよ、今一本ひて筆箇にあらがー。おれ帰らが、筆箇にて  
立あてよきにはかうびおへーと、筆絃とひてかうび。たゞ万筆のあら、筆箇かうあが  
えらか、此ほとあつらだる筆、今ある筆絳たとめ傳へ、そこへあつらいたむとつあらかた  
一と、筆箇いまだとあせてもかわせ、あ、かかよあく、一が、あがううながひて、たゞか  
筆絳がことかう、ひやうーとぞ。筆のあたひはもるーあーにあうと、かわあやね、やうと  
あがら、筆箇までが、馬鹿の毛をすゝへて、獣理のとくへんをだまらかんとするこそ、いとく  
けられ。

(昭和二十一年)

## 一一 猿

この歌のあつやからかとて、水をかめぬ、水あじふが、一程詮めぬ、また堪へがたき、ひ

一

たすりにのむとすむはぬ痛のみ。たてかへことほた、御宇の神の因縁をうけむちて、世に草は  
ゆめやあらかん。」<sup>1</sup> 一ノ氣長是被等三ノから國をまもけ候時、輪橋の羽毛見を御す。其ノ候て  
とがへあがはまくいかよつてお馬やたは仕へてあん、うぐははうから、松目檜扇、末廣、中裕など。  
其の先あつがはせふたせふたせふたせふたせふたせふたせふたせふたせふたせふたせふたせふ  
ぬあがへあがへあがへあがへあがへあがへあがへあがへあがへあがへあがへあがへあがへあが  
たるほまやあといはくばーあくぬ。」<sup>2</sup> かじてあめたちぬるすがて、うつあがへあがへあが  
のたえずあがせつるを、誰がめでたらんやがて結也は、萩の葉むけにあづらへど、草原あがへあが  
あがへいがでか枝がうかびーきつちむすがわ。

(昭和二十一年)

### 一日 草

七草は春の草、の草が、うづらきの草、またかたおひにて花はくあらは、さくふ葉をみるが、草  
せあは、おどりかの草が、すかたあつが、きだ、其の花へまきが、せれ。翁の花あとらへて、あい

キハニボラレの草のが、はえあひ、うづらす、雨あらび、萬やうよ、あしたかれ熟によまつた。  
かつはほじあく風吹らへか、尾花はすのめをに出て、たきかかた秋風にすがへやま、誠に人報を  
み見ゆかむとか。かお花はと細やかだあえがふる、あだの大葉にあめきたる、とおひのれは  
ひあつかへはた尾花とすが花とすが花のやうすおもなまく、雨あらびの名にかなへばあつた。萬  
はやくナメサヒ、かずまくはまくすが一キや、風ふぶねにうづらひよせ、うづらひよせ、  
あくまく、かくへだよす。あれ備すされぬる、花のすがたいとキ、びほに、うづらへ、から大あくあ  
あくまく、とくまつが一キおさへたまよ。萬ばやむる若葉の正ほひえあくぬ、秋の葉たまよ  
こわびたまよ、うづらせても虫の聲をかくあはれあく。何へ来てぬきが、一と回びやとりせ  
人のがたみかとうだが、かく、かくのうがわはすがわん。朝顔はあぐやかだ、あがつき露に紐  
ときて、二月草の白ひ、と薄べうづく。たるき日かすまつまくやうは、かき葉つせ  
ロセーせらせらせら。

(昭和二十一年)

一五 多々屋 扇窓葬場祭詞

一六

吉 麻久 哀伎加 稲親志友多々屋 桃窓乃君乃 德館乃 德前角 宇井可道興美 須白  
須 安波傳 繩石志中 徳慨或事 奈加 沢命 沢德哉 は我共弟角奈在志坐世 墓乃才  
賞 久珠仁敷嶋乃歌乃道遠極米 絵比奴 禮婆日每仁哀留我助且今余此道角進  
武人亭延敬聞 尊貴絵は事医請奉良武 思去仁 我遠残志 還奴道仁坐之絵及事  
乃 暖御志伎 安ほ禮慨或加誰加歎加佐誰加恨良年 沢恨良武然以有禮俗今更為術知婆  
泣久毛待葬乃出座仕奉里 德送仕奉旨事遠天翔留 德靈平久安久聞食志德心平  
穏角是乃奥郡伎角 鎮里座麻せ謹美畏美申須

(明治四十三年三月十三日)

一六 小山安吉遷一曆賀具下室の山祝す カキ

家富み親族兄弟むつま。一きは、人の世の寄みの極み也ん。故に小山安吉一ぬ一具男丁  
家を譲り、息子皆他家に嫁ぐて、つれもあ宋え、うからはらから睡まく。うちそろひて恙  
なく事なく、ゆたかにさかやうは、せためづらき重病の人す。今年遷一曆の歳にあたるはと  
て、ゆの家の名に因み、山によする說とよ説を設け、四方の凡雅士達に歌をこひねがひ、ま  
東み給へる言の葉の花の光をかげて、千世の山口わけのほり、ゆのね折とお給ひを言  
ほぎて、たほひあき一言かゝるす。

(明治四十三年)

一七 湯川暢が病中よめる歌のは カキ

ある日湯川病院造め一臺あるて帰り来て、七八退軒居士詠歌震翁翁を掲巻とし、知己の人に頼たんとおもふた。此一巻は父が病床につかずあり、あつてかうて筆とうわざ叶はぬ方まで、折々詠み一四つものあれど、えぬが一筆書かへよと請はりを曰ひゆす、あれ

か筆なり。こはふつに志れ矣。ち一を画歛すれば翁が永眠の後、夫人三代子ノ刀自からて未だ  
て取るべき歌あら手揮割をと、いはす。僕に書どりて、いさゝ筆加へて、機械一たるには  
うちかば、見の人達甚意とくみ給はんことと、するにても今際までじたゆゑあく、僕にやす  
く鉢一絃ひ一翁の心ばへの壁を一さよ、翁は先師掲善院翁の高弟にて、歌令歌会を、  
大方事とらかに、おのが晚福社を設け一にし、发起人にかばりて先師の比にかほらす、助学  
の人達を諸守一絃ひ一功劳、とえがり一を、おかめむ、あほいまさばやと一のはすすり。  
翁また漢詩の字び深か一かば、閃いとす。云は詩文の巻に瀧りと爰に首く、かくへは  
翁の歌及遺墨のありト、可也。

(明治四十三年)

### 一八 那須宗道 葬場祭詞

是乃齋陽雨昇辰座奉留那須宗道乃命乃棺乃前可通畏美拜毛白久安波禮汝命  
寰待心穏甬衆止物諱一布事久親族家人守親睦世乃諸人ノ交際享久殊勇神乎敬而信

心深伎故仁岡本氏登共仁心遠含世產土乃社角殿半建豆拜歎事為須又佛乃道半貴美  
淨收財寶手施奉留事數奈其他公私閑留事葉仁力手盡志貧伎惠無事方仁限  
里非侵實仁德澤深岐奈且家幸乃殿仁敷嶋乃道手嗜美絵布故掘善翁乃教元子  
仁已寺我為仁兄仁在利茲仁慨多伎未太稀乃齡仁至良慶現世遠限支絵布是母  
猶人乃力乃及波耶幽冥乃神乃御葉奈良哀止悲度術母無擧例些與御伎彼  
底深久收奉留待靈平久安久常南新都鎮里產甲斐奈老乃袖乃庚手搖拂都

恐美歌申頌

(大正三年一月十三日)

### 一九 貝桶の説

九

見合また見覆といへて、依然物に見ゆ、耳白と蛇を用ひとひ。或は毛だまきの目とて、鹿嶋香取の神を用ひて、或は毛だまきの目とて、鹿嶋香取の神を用ひて。鹿嶋香取の神は、えんを経る神といほす。同、蛇をりと。人の面の要れり、とく、とくへ乞うちあて、外の見合するに、ふたあはぬ物あり。よつて貞女兩夫にまみえずの意を寓せりとて、嫁娶の家にかかす蛇をもて祝詞とす。嫁入へてふたび婚禮せぬまゝなひめりあ。また、まめのため見捕を嫁入の術度のうは、おきたするなり。(うはおどとはいう)の道具の第一の上座におくをいふ。

見合せば、いに一へ婦女の奉納なり。三百六十の輪歛をうちて、一片の歛と地貝と称し、悉く場並べて、中央に空所を置き、一序の歛を出貝と称し、一圓(一円)で出て空所に置き、衆圍に坐し、出貝と地貝と相合ひて、地貝を認め、是を合す。あはせたる物えキを腰とす。又見合は婦女のみならず、いに一へ朝廷にて摺神家にても帝にも坐ひてあひて。天祐元年院と淳祐院と左方右方に介け、腰貝をきそひたまひ、繪を賄に出て。また平播國清盛公福原に下向の御守中公達會合へ、見覆せりと。淳祐院日記にあり。

中院宣胤卿日記に、見合の風景歌書様の事あり。上の句を右の目にかくす。見合の歌舟見せ右、

差を左にかくす。

歌かるたといふ物古へはなし。五代出来たるものあり。本は見覆の風う思ひうて作りたつや。本名は歌貝といふなり。また伊勢物語に松明れせりつしまつといふが、たゞあつて事なり。三代、寛鎌厚継松とあります。(可苗曰)昔は終臺をすみて松をたまでとよ一火とせり、故に継松といふなり(伊勢の齋宮の方)。並に歌の上の句を書きて半詠す。葉半船屋、つまりの岸にて、下の句をついたる半此詩をつらまつと名づけ一ある。

また歌かるたといふは墨金洞(こがるた)といふ物の形に似たる故、いふなりべ。かるたといふものは、異國より入りてかかる博美の道具なり。歌貝も本は四角にはせず、将棋の駒の形にするなり。馬の形にする事は、目的の形をまねびたるなり。駒の頭のとがつたるをかたどりありとぞ。又歌貝をとるところなり。歌かるたをばつとほいはぬあり。

近藤新十郎氏に持つたが見補、今はめづらしく、いたへを傳承くさほひあれば、一首の歌をよみて、同窓へおくらむがん。

やよ少々鹿嶋香取の浦づたひ蛇ひろへ見あはせ第百章(大正六年)

## 二〇 尚齒會の記

一一

### 序

尚齒會は、鹿の令官に五年三月廿三日、白栗天後道坊にて始て行ひけり。我朝にて貞觀十九年三月十八日大納言年名卿、小歸山莊にて始めて行ひけり。又安和二年三月十三日大納言左衛卿、栗田口の山莊にて行はれ、其後天策元年三月廿二日大納言宗忠卿、白の山莊にて行はれり。七年又算、三年為康公、前左衛門佐麻呂基後、七十六、所向守中宗、廣儀キ、亭主セ、或部大輔、麻呂敦光、朝臣古、右大輔実光、玄武院少輔、葛平寺登、六十二、此中に基後は病によりて詩はがりをあくづけり。時登席を書せたり、或部少輔、葛平寺登、六十二、此中に基後は病によりて詩はがりをあくづけり。時登席を書せたり、埴下に中納云師時以下侍りけり。皆は些程にて孟酌ありて、或は詩を歌り、或は管絃を奏して、心に仕せて遊戯一叶りとあり。承安三年三月十九日、前大官人直瀬輔、御院寮、寶莊殿院にて、初教の尚齒會を行ひけり。七年、散位敦頼、八歳、神祇伯顯、廣王、七八日、若禱宜成仲翁禱七歳、式部大輔永紀七歳、右京権大夫頼政、昭慶六年、唐補相臣古九、前或部輔維光、昭慶七年、清輔相臣假名序書せたり。尚齒會ハ多くは詩會にて侍り、和歌はめづら一き事すとす。人麿大神の影響は時より參りし。

らん。尚齒會の式は知らぬど、おれどちむいぬるよほどのふくさめにて、いに一人の人の跡をたづねてかくよ会ひ侍つた。

わいぬれば、ゑぐさみもあき、我身にはけづらず、ひぞ春心地すろ

可也

大正十年十一月六日 日曜 晴

正午より岡崎神社にて尚齒會を開く。来會者生小山良義、小川勝門、岩橋興隆、小山政次郎、榎本一実、石田長堅、松岡秀、日良顯純、鎌木融、多屋秀太郎、平井徳一、嶋田五平、長嶋一、那須多三郎、玉置繁泰、森本文江の諸氏と予の十七人なり。七年春予はトメ小山良義、小川勝門、石田長堅、岩橋興隆、榎本一實、松岡秀にて其他は埴下の人なり。榎本大神影像を祭り、小川、那須、榎本の三氏之を執り、祝詞をあぐ。終り、三座有氏詠吟助吟をつとむ。予席を書き命夜の況歌及自分の歌を誦し、歎應歌を

含意に出詠せしめ、之を添削し詠吟せしむ。また自分の腰折を誦し、而て場宴の上復更けて帰宅せり。

一一

鴻臚  
卷之二

ちぎりではたが先たつむ子世の役ニ元をよひをやつりあはせん 宇井弓道 十  
百年の坂草も こゆういきほひたつむよひをゆづるとそまく 小山義雄 八十  
子年ふるおのがまほひにあほえてちぎるか手作とねの友づる 小川勝門 六十七  
朝日さ一父門が やくたの上に子とせをちぎるたうのもろこゑ 橋本一寅 七十  
毛松の梢に草くふ友づるの子とせをちぎる 鶴之助とげキ  
久方の雪井はるかになく田鷹の子とせをちぎる 鶴之助あれ 九  
芦たつによほひちぎりて未色半子とせの坂め道一のへせむ 石田長堅 六十九  
あ一たつと定めていとやすく子世み齒を重ねて 一がす 松岡秀 峰  
芦田鷹の子世のよほひと残はれてかぎりあきせの春をゑがくん 同良 鼎純 七  
年のかかるく てまつひよ子年のだづとよほひちぎらん 箕木融 二  
う一からで誰か尺ぶんせたづのはぐ、むひの子世のゆくま 多喜柳新  
いやさかの君がよほひをちぎるうん雪井にちぎつるのむろ聲  
島田立平

太宗につけさせらるて舞をつるの子世うたが音の長闊あるか  
三絃独の深山にあそぶあーなづはよはひ裏ぬて子世うたふあ  
久かたの雪舟に古くきのゆあり子とせを契つたづの聲 那須又三郎  
あーたづよあほひ契つて君が身は子とせの者をむかへますらん 無本文江  
年高き舟ばの舟にすじつるのハおひを契つた聲のどナ  
西田光房

尚歎今第席席の諸君を喜祝てよめ  
小山義雄君 ふはひよは小山のじくつみ重ね縁ゆん暦のあそ一らぬ  
小川君 瑞埋 みづか手のみとちきりてす年まで神の御前につかへまつらむ  
榎本君 いあり山和やは草木ぬ葉たは君と子年を経たためあり  
小山親光君 衣笠の松に常春亭 つるがらん君におはひをゆづるとぞかく  
岩橋君 いそ松に常くひてうた舞きけほ霞ゆづるな君からでたき  
石田君 秋風より田のほがみうぢあびき豊あるせをたづしほぐらやむ  
松岡君 常盤なる松にやどりて朝日影いづきあちてす世おはがむ

日良 玄 いへ、すり朝ヌのひを荒がへたづと子年を共に経ぬらむ  
銃木 玄 木十鏡川一あとせをたづのみちびゆる震かずほひは神のみこゝう  
多羅 玄 あた、りき者をちきると雪舟よりあさくさのたづをあり来る  
平松 玄 伊勢の鷺の情まよきさのねにて天をハモセヒはひつらか  
嶋田 玄 源 あたづは島田にあれてあさるなりみたくは役によせやよすうん  
長崎 玄 長一准のさばれがきわくあするなりとづく白玉たづる捨るか  
那須 玄 あす季はかぎりあき世子芦たづとまつ巻をば摺りあかま  
蘇本 玄 春かすみかさうゑひて玉キはうおほひゆづうと芦たづのおく  
おふけあけれどおのれしきかしはひて思ひつゝけ、る歌ども

鶴龜爭詠 つのかめとよほひあらまよ千博の役あちあらそえがまなちせの  
龜契詠 離をかく仲たちにせばま代を試の御の御の白毫とちぎら  
松延詠 けふうの二葉のねす年つうむをせあくナモ友とありあむ

竹山年友 遊昇草堂 天をり生そふ竹のふーごとにこもれるよ世ぞ老の友なる  
高有佳趣 も香もて春をよほと萬の死世にめでたと誰が見ざらじ  
菊子熟友 きくみれす秋あが秋から未て猶未だかぬをそ殊小つ  
清浦組屋かむらくみ草人とあせばう一こむーといたへあはざらまとくみ絵印  
に習ひて

わらくの来んと一きげす聞すゑて而れ旅あつといひてかさん

尚善會縁、今々益的の席毛を探題をよめり。

名所菊 菊風の吹上にすける白菊を浪と見まがふ又ぐれりそら  
尚圓菊 あまう子がかいあて聲にかづ一す、おの垣根の玉の白菊  
菊久齋 もえ音と共に咲出一菊の花露ふうすちもあほかざりあり  
絶日愛菊種置一花と白さく花すかう元も若キを集めてぞ見る  
月前菊 己が園の今ナカツある白菊の白ふ垣根をてらす月かげ  
河口菊 我鳥門跡にかほり因と雲隠山とみすにまよひ一ら菊

用意

二八

菊文薄

秀

菊文友

融

菊文友

顯

菊文友

純

菊文友

梅

菊文友

軒

菊文友

一

菊文友

得

菊文友

三

菊文友

三

菊文友

一

二九

情世<sup>シヨウ</sup>集華<sup>ジツカ</sup> 二十九一 緒<sup>シテ</sup>おもてをす。身みのよほき鬼<sup>コトコト</sup>がやめす世<sup>セ</sup>すか  
心<sup>ハ</sup>静<sup>シ</sup>延<sup>ミ</sup>滿<sup>ス</sup> 池水<sup>ヒツイ</sup>久<sup>ク</sup>隆<sup>ス</sup> 強<sup>ス</sup>無<sup>シ</sup>遺<sup>ル</sup>假<sup>マサニ</sup> 霜<sup>スノ</sup>下<sup>ト</sup>ゆぐ桂<sup>シキ</sup>の小<sup>シ</sup>松<sup>モリ</sup>君<sup>カミ</sup>かげにひキ<sup>キ</sup>うつたて春<sup>ハ</sup>たあか<sup>カ</sup>む  
幼<sup>シ</sup>老<sup>シ</sup>四十歲<sup>シシ</sup>といふ。

手えちをば元<sup>ハタハタ</sup>の身<sup>トメ</sup>と祝<sup>ハシメ</sup>おまかで<sup>タガ</sup>を翁<sup>アヤム</sup>には

知命<sup>チメイ</sup>七十歲<sup>シシ</sup>をいふ

耳順<sup>アラツン</sup>六十歲<sup>シシ</sup>をいふ

五十<sup>ハシメ</sup>はいづちを知<sup>ル</sup>ると世<sup>ハ</sup>には百<sup>ハシメ</sup>の年<sup>ハシメ</sup>をあれ<sup>ハ</sup>はあらん  
恩<sup>ハシメ</sup>傳<sup>ハシメ</sup>て六十千丈<sup>ハシメ</sup>の一圓<sup>ハシメ</sup>て御<sup>ハシメ</sup>靈<sup>ハシメ</sup>たるを祝<sup>ハシメ</sup>ふ事<sup>ハシメ</sup>、六十一年目<sup>ハシメ</sup>あり、  
おはひ<sup>ハシメ</sup>を<sup>ハシメ</sup>一圓<sup>ハシメ</sup>を錢<sup>ハシメ</sup>六十一<sup>ハシメ</sup>とせざがゆゑ<sup>ハシメ</sup>てぞ<sup>ハシメ</sup>

古稀<sup>ハシメ</sup>七十<sup>ハシメ</sup>をいふ

十<sup>ハシメ</sup>一<sup>ハシメ</sup>を七<sup>ハシメ</sup>十五<sup>ハシメ</sup>を九<sup>ハシメ</sup>一<sup>ハシメ</sup>まわのよひとてはやすが  
七<sup>ハシメ</sup>壽<sup>ハシメ</sup>七十七<sup>ハシメ</sup>歳<sup>ハシメ</sup>をいふ  
七十<sup>ハシメ</sup>にせつ<sup>ハシメ</sup>くよ<sup>ハシメ</sup>てせし文<sup>ハシメ</sup>字<sup>ハシメ</sup>二<sup>ハシメ</sup>とほく<sup>ハシメ</sup>條<sup>ハシメ</sup>のあ<sup>ハシメ</sup>、は<sup>ハシメ</sup>  
米<sup>ハシメ</sup>加<sup>ハシメ</sup>八十八<sup>ハシメ</sup>歳<sup>ハシメ</sup>をいふ  
八十<sup>ハシメ</sup>にせしハ<sup>ハシメ</sup>とくよ<sup>ハシメ</sup>て言<sup>ハシメ</sup>ほぐ<sup>ハシメ</sup>年<sup>ハシメ</sup>をつあ<sup>ハシメ</sup>一<sup>ハシメ</sup>年のえ<sup>ハシメ</sup>だり  
れ<sup>ハシメ</sup>十<sup>ハシメ</sup>か<sup>ハシメ</sup> そ<sup>ハシメ</sup>からず<sup>ハシメ</sup>十<sup>ハシメ</sup>とせく<sup>ハシメ</sup>て終<sup>ハシメ</sup>業<sup>ハシメ</sup>の向<sup>ハシメ</sup>に<sup>ハシメ</sup>あ<sup>ハシメ</sup>み<sup>ハシメ</sup>く<sup>ハシメ</sup>は<sup>ハシメ</sup>達<sup>ハシメ</sup>めう<sup>ハシメ</sup>と  
九十九<sup>ハシメ</sup>つ<sup>ハシメ</sup>よ<sup>ハシメ</sup>かみ  
九十九<sup>ハシメ</sup>がみ今<sup>ハシメ</sup>ひとすら<sup>ハシメ</sup>の生<sup>ハシメ</sup>三<sup>ハシメ</sup>百<sup>ハシメ</sup>年<sup>ハシメ</sup>の歎<sup>ハシメ</sup>みつら<sup>ハシメ</sup>

一一 機車歌<sup>ハシメ</sup>今<sup>ハシメ</sup>操<sup>ハシメ</sup>教<sup>ハシメ</sup>篇

三栖<sup>ハシメ</sup>小学<sup>ハシメ</sup>操<sup>ハシメ</sup>開<sup>ハシメ</sup>校<sup>ハシメ</sup>式<sup>ハシメ</sup>に（明治三十二年）

8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

玉と「どもみが、すば  
くもとめて学はすば  
高きにのむすまは  
心にかかて三極の山  
三極小学長が薄へる鏡の唱歌を(大正四年)  
一学年の室に掛まく  
襟をたゞして和メニ  
ニテスヤマキ折ニ  
黒ひーづめこうすく  
三人のこころようづゆ  
うそみゆうあすかみ  
清きえはあらはせ  
ひろき知識は備はら  
学びの道の一歩ゆそ  
山ありたりき名をあすよ  
くじらぬ綿代ます鏡  
走をあかずあたらず  
むかへばうつる御すがた  
あわかげみがけますかみ  
うつるにあやすま  
みかけ浮ひよ和メニ

東富田小学校開業式(昭和三十二年)

雪ト電トあつめ?  
かやニ一世にひきがへて  
てらちぬくすゑあき徳代の  
花にさきつて実のりつ  
きへの底のみぐさ  
積んと思は、あるはたみ  
ひたゆまづあらひ得て  
家のあるはひよくつとめ  
寝ふやーて國あふ

田島小学校生徒のため(昭和三十七年)  
一鏡といどみがすば  
つつきといど研玉を  
人のゆかた刀のと  
物かげあくらへらす  
きたふ鏡刃も利からず  
かみの如くとよみか

二 三みの道のやぢまた  
ふみの林にわくいよす  
ひとつ心にへらぬきて  
三田辺の庵の庵よりも  
たか至る山の峯よりも  
心かけうそとあるを  
周參見小学校生徒唱歌を (大正二年)

一周參見の里の学ひ子は  
起居するまひてあはりと  
二 ほびの道に立らす  
いまめあひてあひて  
三 番の道に立らす  
世の禍事に立つはらす

行儀よくおとあく  
徒守かりもろともに  
ばけみつとめて朝夕に  
けんやく字れ語共に  
うあ一正否くみわきて  
徳義字らんじふとむに

## 二二 高崎正風氏帰京の後善哉されたる歌

考郷の花見下さのーける時延元隊を拜み毒りて

みさくきみこけふかうによなづけばあかだと共にちう揚かを  
如意まことえて

雪井揚か  
からみの雪井さくらみ縁ひてのあすけん軒、かがき  
か三首棟紙謡め秋山後斬へあかつ

柳谷舞  
花向宮舞  
お二首 棟紙一たけめおのれがよどす

ち壁上に、ありて

天のーたてらまくさあありナリたか持て事の所とよ。火  
皇太御宮を拜み奉り。

いそじ川いそじがわにからぬ水の水上みずのうへをとまれば神のこころにナリ  
社頭やしろ萬花神まんげがきのみだより川の萬き風すほへりたりは萬あつナリ  
碧萬無雲鶴鶴心。

紀三井寺

ふるまの初はじの山岡見さんおかみがみどりがすむ教の浦うらあみ  
松岡花

ひるくらき山おのゆのナくら花なづかのすきをいちトロまかす  
お六音むくね那須家正なすけい、日高ニ御ごあがつ

因いんにらかすう山萬葉まんようの東郡とうぐんせうねんとは昭和廿九年四月上旬なり。

### 二三 小松内大臣と北條泰時

世に小松の内府と北條泰時タケチと並の賢人のやうすおもかひみみを過りあつ。小松の内府お義経ぎけい、  
皇道こうどうと明らかに一たる人ひとあれば、其行そのうひ皆道理みちに叶うつす。北條泰時タケチは皇道こうどうに關かんく大義だぎを知しらす、  
大逆だいえきを犯はんせり。其はつまくあやづら手てを見て知しるべ。

小松の内府お義経ぎけいは父お義経ぎけいが後白河法皇ごしらかわほうりょうを取と詰めて筑紫ちくしに流なれ、義経ぎけいは詔せしめを聞き、急ぎ父おの両  
八條やつじょうに來くり、其順達そんたつを聽きて甚ひく諫諍けんじやくせられた。其忠實ちゆうじやくの面おもてかな、これで遠とおんで詔せしめかたづけの手て  
からんや、憲けん忠ちゆうを食くついた人ひとといふべ。法皇ほうりょうも聞きて厚こよく爲めための事ことををととく、内府おが心こころ  
の中なかニ思おもつれ。他ほかとは恩おんをもつて報たがせられたりと傳つたせられたとあり。極きわ内府おは小松おへ帰かりて  
後ご、主馬しゆまの判官はんげん盛國せいこくを召めして、重盛じゆせいこそ今朝いまのあさ、別べつて天下ぜんげんの事をを聞き成なる事ことある、私わたしと、かくして  
おは、物もの具ぐ一いつ身みが離はなれと傳つたせと宣あらわとあり。誠に才才能の事ことをを聞きき出だすやうナリと、今朝いまのあさ、又父おを軍ぐんせんととはあ、おと、かくして  
入道相國いぬぢさうこくの謀反ぼうはんの心こころををかとと諭しゆとと聞きええと、平家ひやけ滅没めつぼくににせられた。おほきの賢才けんさい、我わを我わと思おもくする者ものに勢ぜいの附つきかぬかととき、守まぬる者ものあらへや。此こは入道いぬぢは脅おどかかせんせんせず、不意ふいに落おちて

敵へ禪ある事もあらんが、さある時は其身は危険を孕み毒氣、強て父が亡身を取らんせば止ひ事を得ず防護す——とまで用意あつてからん。其件の原手、盛衰記を見はあもひ高つべ。且軍士萬物、於見の後、中門に先て侍共に向ひて契約を續へず、皆々様に參りたる之神妙事と、周の幽王の例をさへひきたるをすと見ゆば平日軍士徵集の款けあり一す。堂勢のつか附かざるを試みたる者、人也。

京平盛京記上、家貞・兵祐を召して子綱を下殺し、西ハ傳一志佈、佛院をあきよーにて、内府に院宣を下さる。綏徳院さまは、人畜一多事と縁の同官僧にひ福祥とい先削にあらず、厚く恩を存すがところに、國事を乱すと欲する御飯に相敵たる。平に追討すより、院宣を下さる久矣。時日中一如へ、父に向ひ奉つて弓矢を引く事はあるべからず、といども、重盛今官に長一様で食る上は勘定又若き奉うがた。此事廻、召を莫定、定て御自書もや、人すら、もう守護一准らせず、重盛がへて侍れば、御命を奉る事に申加へ侍らんと仰せ下さ」と申されば、入道興すが腰を落て、仰に零ひ坐、これは實か虚言かと立へ余一定に候と申す、もやる人毛と尋見と云ふと云ひければ、おおほう餘て小松樹十やうなる聲。一き綏車あるべーと存せば、院宣とて軍兵の守に御被あつては、一室の事だ。と

申時、入道大に詫き玉かと云ふせぬま、高足京就情に兼束れ、時日中、三とく、お家へ道の身也、篠年の日詫うべ。内府に世を譲り申さんするまゝは、向後物にうひや事あるべからず、院宣の大事もあきよと妻房せらるべ。家商と相計らねむにいき、隨ひ幸らぬとあ。是は説文中、保元に化魚、鹿、義相甚丈、庄尉為義を謀一たる先規の事也。延喜元年、入道の謀反を取つて為に謀略に及び、ナムに豈意の内府にて、かゝ偽の事とあせり。君臣の道の重キがゆゑに、やむを得ずはかゝる事一の爲め也。此内府の大義に明らかなることはあらず、かまどあけれど、彼平治の亂に六官源より早馬にてあ鄰の病まで追跡を去り、一らせたるに、清盛を急ぎ下向すが、是をもろりて彦吉を遣すやうと、難念す。されば、事のうち、章が武陵とて是を救ひ奉らざらん。神乎非禮を受けず、何が章へ侵へき、急き下向ありやう。又源氏太、義平三子年譜にて専修院にありと傳きて、清盛以無力にて大勢会ひて討せし事こそ無念也。まづ西國へ境り勢力を強めて、後日に都へ入り、はやと宣へば、重盛を殺して申され、三義と庄にて侵へども、事正引其は宣めて、富家対流の下、諸國へ院宣佈旨をすかべ。即ちて相敵とあらん後、後悔すとも益あるま。一、多能を以て無事をうつ事第の事なり、敢てさ

前の邊ならず、されば、興奮なるどゝの趣向ひて即時に辭苑一たるこそ、後代の名も傳ふべけれヒヽ可。

此大慶安元の春の地鎮西よりめでんとし奉詔を召一の席せ人を庭に降せて對面す、金三千兩を宋朝へ  
候。一子を乞は、齊王山の僧トシキニ子を西京に歸て、田舎を有玉山へ寄せて、重慶が後世帝  
はすと云ひて、めぐらん是を鳴りて、萬里の巻長を凌ぎ、大宋國に之傳うる。齊王山の有大佛  
照壽師徒光に遇ひ奉りて、此因を申され候。造像發願云とあらば、ちうは妄說ならん、當時は佛  
法燈をもる者にて、何事も佛道下説等にて、初生のあるやうにハラ比丘ねは、以て靈鏡をつづ出でて、大慶  
が佛道を信仰一たらやうよこへたまめならんが、ある說に宋國に黃金が藏たる異聞に、齊王  
山中阿彌陀の石燈を筑て國裏を守に貪りて、今博多の社地にあり、又此燈形の石燈あれ  
諸東知恩寺所を遍てあり、又宋中黃金の寶圓心に佛舍利を貯めらるゝを、今恐算法樂寺にありて、  
黃金の恩謝の事此寺の縁起にある。此は縁起家御謹事と云うと平手て、若後傳の作りか  
あらん、寺院の縁起上は、極く新の如き附会の事多きなり。且大臣が薨せらるるは、政和五年八  
月某日、入道を誅めたるは、政和元年七月、其堂神社に祈願し、死を決したる院承、年間不

葬後世を仰せんとおらす此年間大あへきがさるを安元元年二月十九日と云ふに似考。

此大辱病つきていふ。一事なるべく聞えあらずすつて、入道相國福宗の別事あり。誠中の前司盛俊を候る。之で宋朝より赤手の名醫を召へて醫療を加へめ玉へと宣せし乍ら、大臣に感服され候に召へまつ國の尊  
の事黙りて轟り仰公ぬと申すべ。併せは後、氣れ、近侍の拂門はさばかずの賢王にて候らせ恐ひ一かど  
が異國の相人を招ひ中へ入らすを未だ也賢王又は誤り、平朝の耻とぞ見えたれ。況人々重威極め凡人  
が異國の醫師を主導へし奉事、全く國の耻にあすやと有りて、是れ高祖が諭しめ命をさとりて、良醫を  
召へまつて事あでといす。蓋一術焉、術に依りて存命せば、平朝一醫焉、焉に仰り醫術功驗あらゆ  
画焉所詮耳。然奉一本初月既度の朴洞をもつて異邦は過の未だに見えん事、且は國の耻且は首の陵辱  
也。侯令重、庶亡すと云ふと、國の耻を思ふ心をなせんやとあり。斯く一國をあゆみ下り  
つテ大臣にて、異國に苗金を贈り、我後世をやらせんとの事はあるま、一キ事ども可。

此傳奏皆在高麗の間で、大抵に聞く。至仁承久の降事也あらず。東鏡は泰定三年四月十五日晩鐘の程右京化等教

三

の般において相あつて時、武、阿、大江、前の大膳大夫入道院の前司職、今、金等詳議をす。意見まちで、  
所詮國を足利義教の南方の邊境に固め、相行つべきもの。——うそ、大官令覺、阿佐えかほく、解説の勢、キ  
一旦、がるべく、但、東土一揆せざんは、國を守りて日をあらの際、退つて敗北の因たまキが、軍を天皇にまかせ  
早く軍士を東都に登一送はせり。——とくに右柔地兩議をもつて二品官に申すのところ、二品のいほく、上流  
せすんは更に官軍をねりかたからんをす。奉時此詳議の席に列す。おから、其順序を端トである。  
諫章はせり。——

王だすきに第久の大連軍は義村役の大連の策元と、かく其黨の歎にうて所謂陽武らが首を先鋒と爲つた  
と奉時より命には吸へれど、實にほ父に似ず殊勝ある美意焉り而一人有る。奉時が殊勝焉り一輩は  
明慧傳を擱すか。此時父を誅めて善夫の子ニ承王位にあらずといふ事か。一期に厚すまゝもの君の徳心三位  
せらば。然れど残ひ申すんは道理に當り。一かト首を垂れ手を束ねて右隣人に表りて愁ひ便す  
一、此上に首を刎れば命は義に依て縛一。何の諱也所かあん。力も青草す。若また放免を蒙ら  
ば、何するか林字也て、殊の年を置ケルもか。ハキカヒハシニテ一ノ念だ。益々に義時甚矣や開手くれず。  
甚は元主の政所へ國家没まれの事なり。此君の傍代と見て國に在れ方民愁を抱かずと見

な、着徳一統あは、四萬の人民大まに然るべ、私を存するであらば、天下の人の徳きに歸る先駆なきに  
准す、周の武王既に儀に及ぶが、獨自から天下を取て王位に居せり、是はや一臣を開くとも此徳位を改めて引  
の私をして徳位に即申すべし、君を過ち奉るあらず、急ぎ而往之、一ヒシニ奉時に、奉時力なく、父の命若き  
稚きに依て上法セーとあるをもつて、義時が更逆また陽城が道に效一事を辨矣べとあり。

又弓鏡にかけておちぬるまろの日思ひかねほと、泰時只一人難をあげてはせあり、父西はすすめでいかに  
と向ふ。軍のあるべきや。大方のおきてをば、仰の如く其心を得侍りぬ。前一途の所行にて計らひて、奪く  
亂筆を先立て、侍旗をうち、それむかの獻體がの聲も侍りて、參りあらば、泰時之進退いか侍つべか  
らん。此言を尋ね申さんと二人駄せ侍つといふ。泰時とよがりお案までか二ふ回の用かか。甚事  
可。まさしく君の御意に向ひて可也。引へ事はいかん。すなはちの時は、竟をあきらめのつらさたりと、偏にか  
一二すりき申して身を仕舞ひし。ナはあ、ア君は都におはす。あがう、軍兵たまはせば、命を捨てて子  
人か人にあらま。我をひといぢほてみにあきらめにけり。とあるをひき出でて、知れば、泰之の御事は、わから  
ぬ時か計らひて、泰時は上流にて、其年を三を行ふ。其は父の命に従へて、元亨の邊にあらがう  
かば、其還覆いす。すれど、泰時之進退をかくそがれたり。

彼明慧傳に「いかにかく奉時父を諫言するほどの眞心あらず、小松の内府の如くも落第はせば、やがつ周の武王が先駆のことき至事を厚きあからず、これをも黙て父の命苟き難いとぞ、おめく上流たるのみならず、カニシキ三王子を憲、憲り、一帝を廢す者らせる、高麗義時と同節とあす。」又北傳九代紀にセヨ吉日、武義の高麗向の勢を敵滅の勢をもすて院の侍所四士級へ參りて本院を馬の歴、猪突お一轍じんと奏聞一千れど、院は益をす思所詮けナセひだる事をもとより更差當りて猪突の身として、正室にちがつて奉ひやすべあやせ、斯のとま不欲をすばいかにきや、父の命を犯はとぞ、義時に近づき奉る臣は易教柔の禮を表す、「さと並の因人」といふ、心得たらざつて、父を諫言一节との諭は二叶がひかたキア。

然に或は説に奉時が下る奉事と犯せし事は不字の故あとの事で、玉たすきの御注にあり。其は東銅仁義久三十六年五月五日正朝御院宣をさげて、酒口の河原において、武めに相逢ふと御せば、氏院宣を揮すと、將て馬下り着ぬ、其の勇士五千余軍あり、此中に院宣を讀むべきの候がの

由因崎海事奇遇記を相尋ねるところ、勅使酒の小焉やかひゆく、武義國の使人嘉田の三郎は文の博士の名を、夜間を召出一院宣を讀まし」とあり、「さる文直多う故に、は送罪を犯せうといふは、漢字を書き立てるに、一面に餘る事字も附れど、其世の筆識見あり、廣元は更かく、義時が先駆とて引出一トモ、西戎の要例をも、西戎の事向御りて送罪の張本であると、奉時さる字向あかり、故に少しほ道をもあれず、あつて、さとその款の命にまれ、その事の命にまれ、太皇天子向ひ奉る道理とは、免て免事ある、皇神の道の本義までお詫びす。故に、彼送罪を犯せしあと、「ほ、大方うき」あつてらひあす。

顧ふに奉時が義意昇行はあり、ながら、我皇國の大運に罰かづくが故に、犯せし事、あつてらひと。されど、彼明慧傳に父を諫めーとあれば、奉時が後の心にとつて道をいたるにあらざるが、免て角緩あきあり。

伊ノ詔虎卿の神皇正統記に、奉時計らに申して比宸<sup>後嵯峨院</sup>院なり土侍をす恩奉ゆるを、誠に天命也、正詔極り、土侍門の御兄にて御のぼるあたへく、方行もかく、聞えさせ野ひーかは、天照大神の冥慮に代りて計らひ申けらる程あり。左の奉時心平へ改すをほんて、人をすくみ幼にあらす、公家の侍

墨

事あるア本所のわづらひをとめ一聲す。夙に塵あくテ天下助一づまき。断て年代を重  
ね一事、ひとへニ泰時が力とぞ申一傳ふるとあるも、明慧に教訓をうけたる後のおとひなり。  
板彼の母の泰寺の日替は、官軍の唐人を説て出さばり一かば、泰時が手に摶め捕らて其事  
を問はすに、敵を免か。又軍士の弱れて陽れ居るを、我身縛にあはんと、情をくじ出一テ敵の  
為に身命を奪はせん事を宿る教訓を傳ふ。既すをからば油のうち加波の下にも隠て取ら  
せば知と何。併ぶこれ政事の為ならずは、愚傍が首を刎らるべとなり。泰時が此傳を伝佈  
せらば此時事のニシノ。

泰時が明慧房をゆく信佈一テ、其教訓を受け乍、法師事の叙に、我朝は神代より皇帝御他莫  
ヘず、一朝のあ跡悪く國王の物に恨むと云ふ事な。然水は天下に孕まれて、義を存せんゆゑ、  
命を奪ひ王をど、辱む事、あるや。是と皆くとは我朝の計に出て、天竺震旦に移るべ。尊  
ミ私ニ威儀を振ひて官軍を亡し、剣へ々々天香を擧げて、盡國に移り奉り、皇孫在宮日御雲  
宗を國々に流せし事、多聞た旨ナリ。冥の國、閻天の咎めあがらんや。小猿の徳を以て其川大を贈  
ふべからず。並々の益をかつて歸郷を消す事あるべからず。待機を見立、星程の理に背く事一給  
有などと、王たすきにへるかニ。

泰時若仁人清りて、不肖愚昧の我ながら、政を官で天下を治むる事は、一脉に明慧上人の御  
恩なりとぞ。

すれば泰時元より忠實の心一はありあから、文盲不学の人なり一かば、父の命など。  
天皇の詔には皆へ縛てふ重き大戮を知らず故に、かう善心はありあから、且つか一ニキ  
大戮を犯せざりといへる說易もあたし。惜いが、泰時、素々以前に明慧の教訓、  
さうけたらんには、かく大戮を犯さうらま、ものせや。

(明治十九年)

(瓊屋隨筆第十二編終)

四七

## 編 輯 後記

瓊巖隨筆の墨字も既に第十三編に及び、これまで遺稿の約三分の二と株録一巻になつた。併し  
字の捺記すらあらず一為、略し統一を缺き藍録ものにあり仕舞つた事も遺憾とする。  
実は糸慶幸隨筆、女百人一首、山東百人一首などは、元未瓊巖隨筆のうちに入れてあるたゞ  
へと、之はむろ瓊巖著書とでもして、其中に瓊巖集も瓊巖隨筆もその他のも包含  
せめた方がよかつたかも一れまい。未株録のもの、中には紀伊弘和歌集一冊(之は紀伊謹  
夙土記の歌を抄出之に他の和歌集のと合かせもの)、三十六人撰後六人撰新三十六人撰に對する  
愚按評及夷歌一冊、興太閤論一冊及び歴史隨筆中からの書抜叢冊などあるが、之等の墨  
寫は軽く他日に譲り、今後瓊巖集の整理に従事したいと思ふ。

この墨写不列物を志した方々のうちには、余冊原本と猪俣存下する向もお前の方も  
誠にありがたい事と思つてゐる。

尚本編が昌黎篇といふ譯ではないが、先づ一段墨を考へるので、特に私の希望をうながす詩

文と頂いた方や、先考故後間もあけぬ瓊巖集初編を出たとき、詩歌をお寄せ下さった  
方もあるので、該に附録として掲載し、御厚意を記念すると共に、感謝の意を表する事と  
し、最後に私の拙手一文を加へておいた。

(龍水記)

## ○ 正誤

既刊のものを見ると可なり誤記の多いのは誠にお悔いの如第である。前後の闇摩から得  
ていてそれが誤字とわかるものもあるので、一々正誤表を添へぬ事とし、茲に主なる  
ものだけを正誤しておく。

## 第一編(初刷の誤)

六夏逆行「天神親帥」とあるは「天皇親帥」の誤

三百頁第十三行に「程にありとも」とあるは「程にありたりとも」の誤

卅九頁第三行に「古は思ふ事時は」とあるは「古は思ふ事えき時は」の誤

辛三頁第八行に「ねすりの花」とあるは「ねすりの衣」の誤

第三編

一頁第6行に「栗田寛」とあるは「栗田寛」の誤

二頁第十行に「熟田津」とあるは「熟田津」の誤

六頁第七行に「輶持王子」とあるは「接持王子」の誤

九頁第7行に「メメサキ王子」とあるは「メメザキ王子」の誤

三十一頁一行に「叶王子」とあるは「叶王子」の誤

第四編

十四頁第三行に「聞花獨自樂」とあるは「聞花獨自樂」の誤

三十頁初行に「寢の百首」とあるは「寝汽の百首」の誤

第五編

三三四頁第十三行に「文室康秀」とあるは「文室康秀」の誤

三九頁第八行に「口すかあき」とあるは「口ナがなき」の誤

第六編

十六頁流行に「あほあざ」とあるは「おほあざ」の誤

四十頁第1行に「金貰圖交付」とあるは「金貰歩交付」の誤

五十頁大比叡の事の初行に「壬午年甲寅十月四日」とあるは「十一月四日」の誤

第七編

三十四頁初行に「寢汽の百首」とあるは「寝汽の百首」の誤

三十九頁第八行に「口すかあき」とあるは「口ナがなき」の誤

第八編

五十三頁第十三行に「非道強敵」とあるは「非道強敵」の誤

三十九頁第八行に「口すかあき」とあるは「口ナがなき」の誤

○宇井可道遺稿既刊書同

璞庵集初編 教集

第二編 同

璞庵隨筆第一編 神武天皇傳東征傳順略考

第三編 同

浪の檜屑(教詔)

第四編 同

年譜圖序(附十三篇)

第五編 同

年譜録名勝誌

第六編 同

悲哀百人一首

第七編 同

天狗の観(附三三篇)

第八編 同

花に落花すると萎凋するよ別

あとこと外セ三公篇

五一

同 同 同 同  
 第九編 水滸記 十一外篇  
 第十編 西遊記 十二外篇  
 第十一編 我が家の由緒  
 第十三編 大雨といふ一節 十三外篇  
 及附錄

九月刊行  
 九月刊行  
 十月刊行

同 同 同 同

## 附 錄

故宇井大人の遺稿蝶屋集の成りたるを見て 井村興乘  
 宇原也水す翁代をひきて贈かむ

贈水以テ 嘉西志らぬ乃

一巻歌篇千古留 若鶴騰試仙游 可憐錦冰城頭月  
 曾照佳人別後愁  
 挽可並盟兄

慈華鷗汀

(以上は蝶屋集初編刊行の際頂けたもの)

南紀偉材出 舜無成一家 伊人総可通 史筆帶詞花  
其性溫如玉 敬神直似麻 子能經父志 遺著發精華  
讀瓊屋隨筆題其後 福田靜處

### 瓊屋隨筆をよみて

雜賀貞次郎

昭和三、四年の文、私は「田舎町誌」を編纂した際、「瓊屋隨筆」の稿本の一部と、幸いとも借覽の許を得て、資料とさせていたいたりであるが、その折隨筆のうち、明治二十二年大水害の記事など、可憐大人自から経験を中心として、平明にて毫も文節なく精確、詳細を極め、地方史上の稀有の文献たるを知るなど、當時大きな喜びと忝あざと感じたのを、今もハツキリ覺えてゐる。

しかし、私が「瓊屋隨筆」に初めて觸れたのは、三歳よりも少し古い。乃ち大正十三年雑誌傳説三森村山崎正男君の編輯  
発行、第三号で慶刊第三號に「瓊屋隨筆」にて天狗の説外二篇が抄出されめたが、その翌年私は右の天狗の説の中にあり米作、萬歳二人の項を簡約して抄出し、柳田國男氏の許へ書き送つたところ、氏は「アサヒグラフ」大正十四年に連載した「山の人生」に瓊屋隨筆所載で私の報告としてこれを引用し、後ち「山の人生」が單行本となると私も一部を譲つてくれた。誠て昭和五年九月、私は「民俗學」ニノ九へ「神隱の説」を出一たが、その中には瓊屋隨筆中の天狗の説の抄出を加へてある。そんなことからであらうか、柳田氏は「瓊屋隨筆」の民俗の記載だけを出版してはどうだらう、宇井家の徳意見を伺つてはとの手紙を寄せられたりーた。

私はさうした繋がりと、かつは田邊田邊を中心とした地方の歴史などに興味をもつてゐるので、また「瓊屋隨筆」を通覽したいと、かなり以前から絶えず思つてゐた。ところが、今春から謄写版印刷となつて、その少く部数のうちから、私にも毎冊割安、惠與されるのは誠に幸い。私は所謂平生の渴望を歎いた喜びと、毎冊啓発する

>ところあう喜びとに、言ひ知らぬ草福を感じてゐる。

「瓊瑠隨筆」に對して批評がまといこと、假令元が推称、讚嘆であるとする。禮でないと思ふから差控へきおく。殊に「浪の藻屑」「女百人一首」「悲哀百人一首」等の大作に就ては、必ずべき讀る人が自ら別に存するであらう。たゞ「確に一説たり」<sup>第一編</sup> 結東征候跡序や年裏温泉の定説たる年裏温泉序をものする一面、鎌後紀 木駄翁は「特に又、文書くことを好まれて」<sup>序</sup> 瓊瑠集と言はずであるか、いろいろの見聞を書き留められ、それが多方面に、多岐に亘つてゐるが、その一端には主として第一編所收のようだ。大正中年以後に盛んになった俚俗、民謡、方言のことなどと、既に明治に多く書き止められ、中には所謂民俗学者たちが、最近に注意しはじめた大國、太食の詠にまで及んでゐる。官職の暇には櫻陰翁の後を承けて晚晴社と結び、田邊の初歌を指導すると共に、度々各地に風交して事しげき中に、一人かうしたもの書きを樂しみ、八十歳の高齢である「年裏御名勝誌」を編まれたのを思ふと、ゆかしくも亦、深く敬服の外はない。

「瓊瑠隨筆」の體寫版本刷は、稿本のまゝでは他日散佚の憂ひがあるといふので、稀じめ少く備へられたのである。<sup>第一編</sup> 第二編 かゝこの大部のもの、體寫の勞苦を思ふにつけ、私は、大人は後嗣に幸ひへ惠まれてゐることを、しみくと祝福するのである。

(昭和一、九、二三)

父を語る

宇井縫藏

父は若い時から村の庄屋をつとめ、また區長や村長などをつとめた。四十三歳のとき西牟婁郡書記に任せられ、勤続二十年に及び、後には第一二科長を兼ねて郡役所の文字引といはれ、同僚や郡内町村吏員の信頼を厚く、次の郡長とて擬せられてゐたのであるが、性末の剛直いがへんは官衙の游泳術に拙かつた為、いつも警用せられる様を免れた。そこで多年郡行政の為に盡せし功勞にむくられるものは何でもいたが、それは必ず政事の手は郡行政の上にまで及び、黨勢の擴張にこれ汲々たる政

富人の自由にならない父は、彼の忌を竹とすり、當時地方政黨の頭目となりふべき、出谷某、小山同某、岡本某等は、新たに永任せし郡長、警察部上りの中建某とはかりて莫大な強要するにいたつた。その時はさすが温厚宏量の父も憤懣禁じ得なかつたものと見え、其にうなされた私歌の上に、その聲聲をもらつてゐるやうのが少くない。郡主親を辞めながら、ある実業家に頼まれて、田邊銀行創立の事務につき拂ひ、ついで支那人となつたが、讀書人であつて歌人である父は、元より実業界の人とあつべき極ではない。其性格はあまりにも直情猛烈であり、融通性に乏しかつた。それで嫌氣がナーハしたものと見え、之は二年たらずにてやめてしまつたのである。

それから跡をせらかたまでの二十二年ばかりは、全く悠々自適の生活で、明け暮れ甚ざしてお讀書と私歌に日を過へた。朝は早くから机に向ひ、夜は寝に就くまで手から巻き指ぐ車なく、この車は死の床につくまでのほらあかつた。環境の変化は往々人の健康に影響を及ぼすもので、軽病にあたるもののが俄に渾沌につれて無病に改善する場合に、世を早めるといふ事は世間によくの例を見る。父は機器の強健によるであつた。

うが、かく一へ十六歳の高齢を保つ事が出来たのである。之は書を讀み和歌を誦するなど、ふ然殊があり、平素少しの屈託を感じず、あがた馬に外からひと信してゐる。父は強健であったと云ふへ、生前疾患はなく、されど、それは若い時からの太酒がたつたものであつたといはれた。酒は嘗たすべきであつて、隨分暴飲をしてしまつたのである。晩年は酒量を次第に減つたが、晚酌の一本は必ず常ひとせられてゐたのである。

父のよそいお酒量があつた。併し若ひ頃には澤瑞鶴を嗜むし、またそれが古本とすまへあつたらしく、廿歳のときある人形芝居の一塵に加わり澤瑞鶴を夫として口座簿から裏籠壁へかけた。一塵た車があると誰もおもひ、またその車を白詠の中にも書いてある。父は首から肉身もよく寒た車たる体格であった。よく肥ええたが、瘦せて、夏は人一倍暑がるが故で、水風呂をたづねて入つたり、一早に或御も井戸端で水を浴びる事もあり、夜はふとんの上に「ざ」を敷いてまくに寝る事もあつた。若くまづから貰ひ、ひの泡の方で、他から見ねば隣の横柄に見えたかも知れぬが、家

庭の人とては、家臣等出入のものに頗るやさしく、孫たちにとつても、誠によくおしゃべりとて慕はれてゐた。故神宗祖の念は強く、朔日十五日の氏神詣は不ぬるまで怠る事なかつた。

父は即ち筆ままでまた非常に几帳面あちであつた事は、まことにされたものを見てもわかる。數十年間かゝらず日誌をつけた事でもねらわる。數十年かけて日誌を書きといふ事は、とてか私共の書類の出来の事で、之は意志の強かつたといふ一面を物語るものである。も一つ意志の強かつた例として之があつた。父は老い頃から煙草が好きであったが、七十歳をすぎて何が感ずる所あつたうえで、禁煙を勧行してその後は一度も煙管を口にしあがたといふ事である。

私が宇井家に入つたのは、父が六十歳をすぎてからのことである。その頃の父は頗る貧素儕猶で清貧に甘んじて我られた。併し時折は豪勢あり一数年前の事を語り、残念がれせられた事がある。父には三人の女児あり、長女(私)は七人の子を絶えて三十、七歳の若さで死ぬる。次女は他へ嫁つて勤産でなされた。父も母も長命であるだけ

けれども、晩年ににおける父は家庭的には幸福とはいひがた、主上敵人の旗も直親もつゞくに忍むつて、これら重き不幸のため、長生せず年半足らずを見ゆるがつらうとよく黙つておられた。私は多數の子供をかへ、主に養育するにあはれて、先づたる父母に主養の任せあがた幸を、今に刻つて、誠に申譯あい事を一たと考へてゐる。併し今では多くの子女も聞く目鼻がつき、園地にある私はせめて農家の整理をして世にあすやうにすれば、城下の生前を養は未能なつたお詫びあ事やうかと思ひ、又仕事を行つてゐる次第である。

昭和十一年十月五日書行 (非著手)

大波おが、阪急電根住宮地  
編緒及夢者 宇井經利

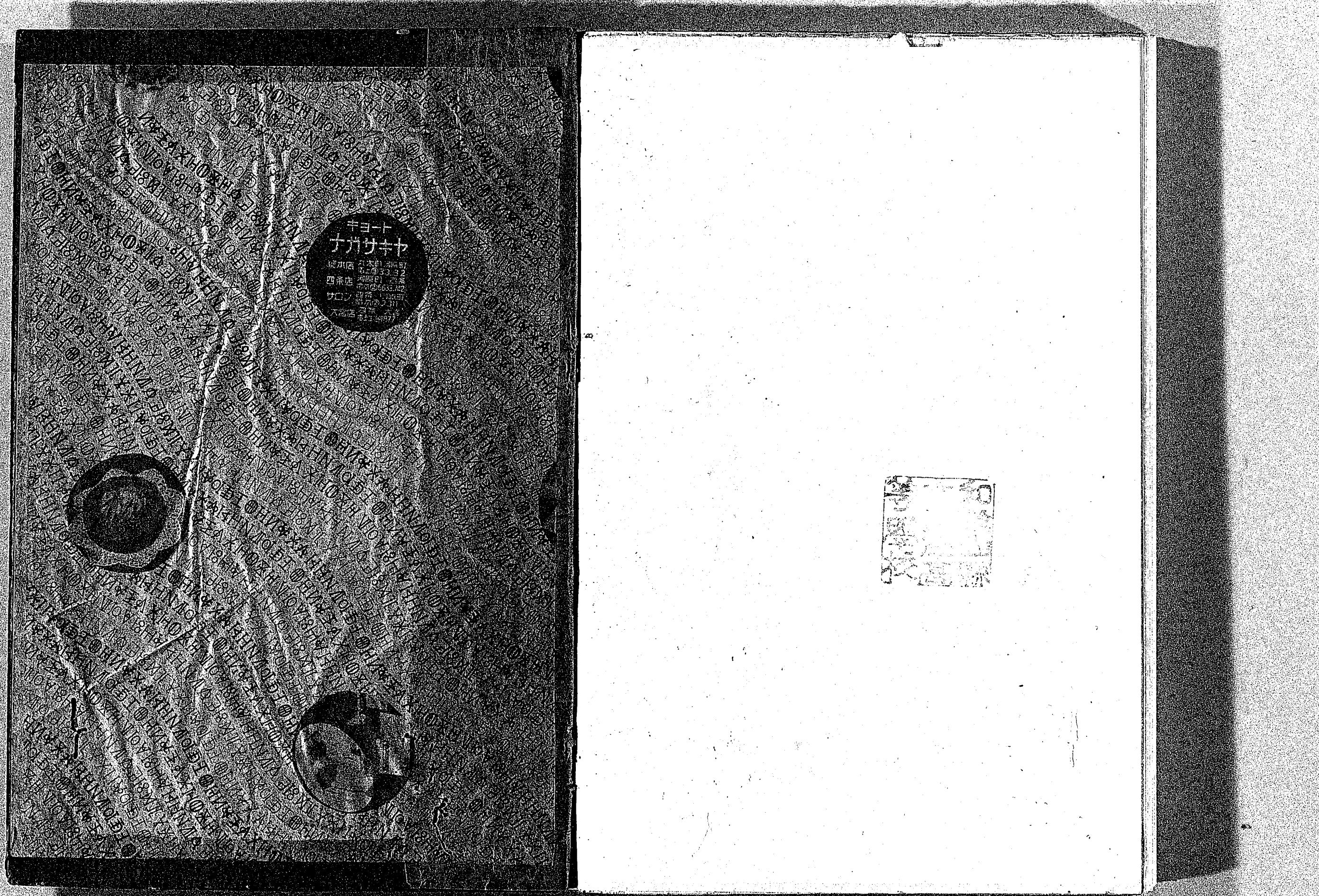
8 9 県立串本古座高校所蔵 中根文庫 資料  
番号

04030

1 2 3 4 5 6 7 8 9 160 1 2 3 4 5 6 7 8 9

8 9 10 県立串本古座高校所蔵 中根文庫 資料番号 04030 1 2 3 4 5 6 7 8 9 160 1 2 3 4 5 6 7 8 9

8 9 10 県立串本古座高校所蔵 中根文庫 資料番号 04030 1 2 3 4 5 6 7 8 9 160 1 2 3 4 5 6 7 8 9



8 9 10 県立串本古座高校所蔵 中根文庫 資料番号 04030 1 2 3 4 5 6 7 8 9 160 1 2 3 4 5 6 7 8 9

8 9 県立串本古座高校所蔵 中根文庫 資料  
番号

04030

1 2 3 4 5 6 7 8 9 160 1 2 3 4 5 6 7 8 9